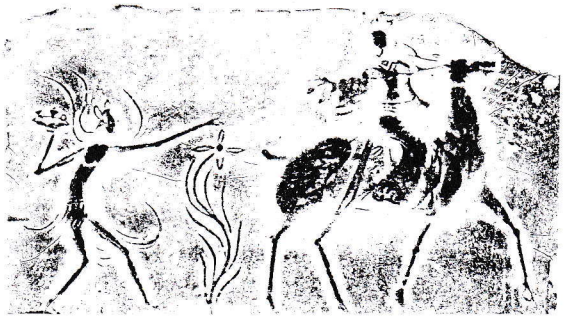

大分県書道　令和６年12月号　No. ４１４

『離洛帖』から学んだこと

理事　山﨑五月（皐月）

月日の経つのは早く、今年も残りわずかとなりました。今年一年を振り返ってみると、書道を学ぶ者としての最大の収穫は、二月に県立美術館で開催された畠山美術館の名品展で、平安時代の和様の名品「離洛帖」を見ることができたことです。その日の走り書きのメモを片手に、印象に残ったことを書きたいと思います。

「離洛帖」の前評判の高さにつられ、文章の内容や一字一字の確認など若干の予習をして会場へと急ぎました。まず入口で最初に目にしたのは国宝「千利休の書状」。強く洗練された線、空間、無駄のない上品さに感動し、「素晴らしい会場に足を踏み入れた」と心の中で感嘆しました。

順番に名品の数々を一通り見て、いよいよお目当ての「離洛帖」。平安時代（九九一）の藤原佐理の紙本墨の横額です。「これか」としばし眺め、その堂々とした存在感に圧倒されました。運よく本会理事の池田大方先生が会場にいらして、「これは幸運だ」とご指導をお願いしました。時代の背景、内容の説明、書状を書いた時の心情など詳しく説明していただき、再度前に立ってみると、鑑賞眼がワンランク上がった気がしました。

池田先生曰く、「藤原佐理さまもこの書状がまさか千年以上の今の時代まで大事にされ、偉大な古典として重要視されるとは思いもかけなかったでしょうね」と。なんだか感慨無量の気分になり会場を後にしました。

感激の薄れないうちにと、早速、法帖を買い求め、臨書してみました。いざ臨書してみると、書状であるため基本的な行草の字形よりも随分省略されていて、想像もつかない字の連続。左端の釈文を確認しながら書き進めました。難しいけど面白い、和様の手書き文なので字形の変化、大小、肥瘦、潤渇、連綿、流麗な全体感など、すべてが古典学習で心がけなければならないことがいっぱい詰まっていると感じました。

二行目の「恐鬱」は超ダイナミックで、一見一文字に見える効果的な表現がすごい。理解に苦しんだ「幸甚幸甚」の繰り返しの部分、二字目の最終画をハネあげ、「幸」の右へ点を書き「甚」の下の点へと繋いで書き上げている、新しい発見でした。ある本に『自分にとって臨書することは、千年余りの時を越えて書する人に会いにゆくことなのです。』とありました。すごいことですね。

改めて書を学べることに感謝し、日々臨書に徹していきたいと思います。そして、これまで支えてくださった恩師や先輩、書友の仲間の皆様に心から感謝申し上げます。書道を学ぶ喜びと幸せを感じながら、新しい年を迎えたいと思います。